

国際化時代の人材育成



随 筆

古 城 紀 雄*

The way of the personnel training of the globalization era

Key Words : personnel training, globalization era

大学には入学して来た学生を優秀な人材に育成して輩出することで社会に貢献する責務がある。そのため法人化後の国立大学では様々な目標を掲げて特徴ある特性を有する学生・院生の教育に邁進している。なかでも今日のグローバルな動きにしっかり対応できるための「国際性の涵養」は各大学が例外なく教育方針として掲げている。本稿では国際力に溢れる人材育成のためになされている所謂「大学における国際交流の推進」の流れがもつ効果及び問題点を共有し、さらに優秀な人材の送り出しへつなげたい。

1 私自身

大学の教養部時代の私は、英会話力を醸成して国際理解活動に活用しようという「ISA」というクラブ活動に没頭し、部長も務めたことであるが、専門課程へ移行し、大学3年の秋以降は当初から希望の大学院を目指した。その希望がかなえられ、阪大冶金の修士課程を終えた段階で助手になることを勧められた。爾来、定年まで39年間大学に身を置くことになり、定年を迎えて後のこの3年間も引き続き特任教授として微力を尽くしている。この間、1981年から1年間であるが米国の大学に上級博士研究員として滞在する機会があった。また、後半の20年は留学生交流推進を旨とする仕事に携わった。

2 この時代をどう捉えるか

この40年余りの間に誰しも指摘するように大きく価値観が変わった。否応なしに進展する国際化の中で、会社人間の消滅、個性的で多様な価値観の容認はもとより、「じっと辛抱して定年を迎え、その日花束をもらって帰宅して奥さんから『お疲れさま』との言葉をもらって、ああおれの人生は美しかったな」と述懐するような流れ、が全く瓦解している。一心不乱にいい大学・いい会社を目ざし、「そこに属することをステータスにして、先輩を敬い後輩を育てて同期が肩を組んで異端者を出さないで協調する」ことが最も価値あるとされた世界は終わった。異なる文化・価値観を理解し評価し可能な限り受容して、適切な場所にどんどんキャリアアップする時代となったのである。その認識に立てば、有用な人材を輩出すべき大学も教育指導方針を方向転換することを余儀なくされてきた。

特に国際性豊かな人材に育てる流れは、米国のトップ大学においても活性化している位で、ましてや、米国大学のひとり勝ちの阻止を意識するヨーロッパやアジアの有数の大学においてかなり意識的に戦略が展開されている。研究面でもしかりで、国際化がその大学の将来の盛衰を決定するという認識は今や共通している。

3 「国際化」ということ

筆者は科学研究費・基盤A研究「大学国際化の指標策定に関する実証的研究」の代表者を務めて、大項目8、中項目23、小項目49の指標を検討し提案した。それだけ「国際化」という耳さわりの良い言葉の内容は多岐にわたり、従ってその普遍的指標はここでは詳述しないが一義的に定めようがない。

ただ、「国際人材」の要件としては以下の三つが挙げられよう。(1) 国際コミュニケーション力、(2)



*Norio FURUSHIRO

1944年7月生

大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻修士課程

現在、大阪大学世界トップレベル研究拠点免疫学フロンティア研究センター 企画室 特任教授(名誉教授)

工学博士(大阪大学) 材料組織制御学

TEL : 06-6879-4271

FAX : 06-6879-4271

E-mail : furushiro@ifrec.osaka-u.ac.jp

国際理解力、(3) 国際的自発的創造力である。(1) はまずは語学力であり、普通には英語力と考えてよからう。(2) は「異文化理解力」とも言える力で、均質で突出しないことを美德とする日本的生き方が、時として国際人としては欠格者を多く作り出している。この点では大きな変革を必要とする。(3) は基礎的教養と専門的学力を背景に発揮できる自発的創造力はもとより期待されていることであるが、その上、それがグローバルな環境でも十分発揮できる能力である。

4 大学での人材育成目標

以上の視点にたって「どんな学生にどのようにして育てるか」を考える時、現代的には「国際人材」への要件を満たすという点もしっかり考慮されなければならない。すなわち、当然身につけるべき基礎・専門学力に加え、英語などの語学力を基礎としたグローバルに通用するレベルでの「異文化理解力」、「自発的創造力」の醸成が大学の義務ということになる。

このような能力の付与に最も有効な方法は海外留学である。私は留学生交流に関わる期間も長かったので、誰よりこのことを強調できるしすべき立場にあると思っている。半年でも1年間でも海外留学してきた学生が、まさに使用前使用後の劇的な成長を遂げて帰国し、社会へ雄飛してゆく例を数多く実感してきた。それと同様の雰囲気・流れを学内で構築せんとする傾向こそ大切である。昨今言葉だけの国際交流や留学生交流の推進は、意識的に「学生が海外留学したと同じ効果」を如何に具現化するかとの議論のもとに進められるべきである。外国人留学生を一般学生から隔離し、外国人学生を増やし、何と彼ら留学生の国際化のためのみに苦心している我が国の多くの大学は、「日本人学生の教育の一貫としての留学生交流推進」に方向を再検討して行かねばならないと考える。

5 学生の国際化を阻害する要因

今日の我が国においては、仮に大学自体の姿勢が上述した意味で適切で、日本人学生が国際化の方向へ邁進しようとしても、いくつかの要因がその障害となっている。

その第1番目には「両親」がある。とくに父親には「お父さんの美しい人生観」から未だに抜け出せ

ず、依然として「外国かぶれ」みたいな前時代的亡霊概念を保持して「自分の子供にはそんなことにならないように」手を打ってくるのである。そんな両親には「自分たちがいかに子供の人生の可能性を狭めているか」の認識がない。実際、私の知る海外留学の経験者や正しく現代的流れを認識されている方々は、多少の他の要因レベルを下げても我が子の国際化傾向を全面的にバックアップされて居る事実がある。

教育者たるを忘れた大学教授(教員)もまた阻害要因である。よくある例は研究者としては世界的に活躍している教員の場合である。「自分のところが世界の研究の最先端を走っているのに、何故海外へでかけねばならないのか」と海外留学を申し出た学生や門下にパワハラ的に迫る光景は前時代的な光景になりつつあるが、ゼロではない。若干それが「若い教員に外国での研究生生活を体験させること」も、将来の大学の国際化の戦略として不可欠である。

しかし、上述した両親や大学教授のみならず、いわゆる日本社会を構成している大人達の風潮が依然として「横並び」「突出なし」を掲げることであれば、若い学生の国際化を結果として最も阻害する大きな要因である。大学も変わって行くべきはそうでありながら、実は日本社会もグローバルイゼーションを許容し促進してゆかねばならないとの見方も叫ばれて久しいことである。

因みに、「日本に学ぶ留学生が日本社会に望む」ことの内、強いクレームを含む意見としては(1) 理系なので日本で5年間ほど働いて帰国したいが、「一生日本で働きたい」と言わないと雇ってもらえない、(2) 日本では外国人差別、男女差別が激しいので働きたくない、(3) 日本人は外国人に対してオープンではない。外国人社長にはなれない、などがある。勿論、評価の高い以下のような意見も多く聞かれる。(1) 自分の働いている日本の企業は雰囲気もよく仕事上はフェアであり、外国人だからと言って苦勞するという事はない。(2) 日本に残って働いて自分を高めたい。(3) 自分のキャリアアップのために最先端技術を持ち日本企業で働きたい。企業も国際的に優秀である留学生を活用しないと損をするのではないか、等々。

日本で学んだ留学生を、今後は日本の国際化を底辺で進展させるグループのリソースとして行く流れ

が重要である。

6 有用な人材の輩出への願い ―結びに変えて―

ある年、シアトルで開催された「先端材料の超塑性・超塑性成形」に関する国際会議に出席した。日本の大学からの発表に加えて、日本企業からの招待講演者がきちんと立派に発表し質疑応答をこなしていて、今更ながら日本企業の質の高さを実感できた。特に最先端自動車製造技術に関しての某社の発表には他の会場とは異なり満員の聴衆が押しかけ、質疑応答も活発に予定を超過して続けられた。その日本人発表者とバンケットで一緒に過ごす機会があり、発表内容だけにとどまらず、外国人研究者を交えながらも政治・経済、はては人生論までも話は弾んだ。その発表者の年齢は40歳位で、語学力はもとより堪能で、「企業おたく」のような偏った生き方では決してなく、現代に必要でまことに相応しい中堅技術者という印象であった。「大学は学生を、このようにできる人材に育てて、社会に輩出すべきだ」と

実感したのは事実である。

大学入学までの人物評価は100%ペーパーテストの結果によると言ってよかろう。しかし、上述の優秀な人材はいわゆる旧帝国大学系ではない地方大学の出身者であった。振り返って、私の阪大での教え子で卒業後いわゆる重役まで昇進した学生には、結構な割合で大学では留年したものが多いという事実がある。これらふたつの話は、先に強調したように、社会に出て活躍する人物かどうかは、単にペーパーテストによる学力によって決まるのではないということを、明確に示している。さらに、優秀な国際人材としての評価という点では、学力の部分がさらに小さくなり、表現力、協調性、リーダーシップなどに重きが置かれている現実社会を、大学関係者はもっと知るべきである。まずは学内で腰を落ち着けて意見交換し、この国際化時代の大学における人材育成についてしっかりと合意を形成することから始めなくてはならない。(本稿は、筆者による講演原稿に最近の想いを加筆して作成された。)

